

# 日本農業新聞

2018年(平成30年) 6月4日 月曜日

農業の魅力と魔力。日々  
 そのように感じながら、週  
 1、2日は農作業。他の日  
 は、青果物流通や青果市場  
 経営、あるいは農業発展に  
 向けての活動。やればやる  
 ほど、農業の奥深さ、素晴  
 らしさ、そして難しさを感じ  
 じる。

この4月以降、度々25度  
 を超え、既に畑の上では猛  
 暑、汗だく。雨の度にステ  
 シュール変更、晴耕雨誑な  
 どのんきなことは言えず。  
 急に暑くなり過ぎて、一気  
 に収穫が進み、供給過剰で  
 価格は暴落。  
 そんな超難解方程式で、  
 思い通りにならないことだ  
 らげの農業経営。それでも  
 種は芽を出し、花を咲かせ、  
 実をつけて、われわれ

## 日本農業の新たな産業構造

### 論点



ナチュラルアート代表 鈴木 誠

すずき・まこと 1966年  
 青森市生まれ。慶應義塾大学  
 卒。東洋信託銀行(現三菱UFJ  
 J信託銀行)を経て慶応大学  
 でMBA取得。2003年に株  
 式会社ナチュラルアートを設  
 立。「脱サラ農業で年商110  
 億円―元銀行マンの挑戦」など。

# 消費者や国民目線で

に食料やビジネスの機会を  
 もたらしてくれる。そこに  
 は、人知を超えた素晴らし  
 さと、一方で時には魔力と  
 なってわれわれに襲い掛か  
 ってくる。

日本農業は、いま大転換  
 点を迎えた。

いよいよ担い手不足は現  
 実。栽培はできても、人手  
 不足で収穫できず放置され  
 た畑が増加。不安定な天候  
 はとどまることを知らず。  
 運賃高騰やドライバー不足  
 も深刻。

業界では、JAと非J  
 の議論。議論が矮小(わい  
 しょう)化され、部分最適  
 ばかりを追い求め、業界や  
 社会の全体最適解を見いだ  
 せず。ゼロサムゲーム、関  
 係当事者の利益の奪い合い  
 では、業界の発展などあり  
 得ない。

関係当事者が、協力して  
 付加価値を創造し、そのメ  
 リットを皆で共有すべきな  
 のに。次第に、日本農業は  
 あるべき姿から遠ざかり、  
 衰退。

食料危機目前に  
 いま日本も、食料インフ  
 レの入り口に立った。国内

農業者はますます減少、一  
 部大型農業法人が頑張った  
 ところで、到底社会ニーズ  
 を充足できず。海外は、既  
 に食料不足で食料インフレ  
 真った中、輸入農作物の  
 価格上昇は必至。このまま  
 では、社会全体が不利益を  
 被ることは明らか。

今年(2018)は明治維新から15  
 0年。まさに、日本農業に  
 は明治維新的合従連衡が求  
 められる。合従連衡とは、  
 それまでの秩序を見直し、  
 改めて未来のため、過去に  
 依存しない枠組を構築する  
 こと。

明治維新は、長年続いた  
 封建制度のゆがみと、海外  
 の脅威が契機となり、新し  
 い時代を切り開いた。薩長  
 雄藩を中心に、それまで日  
 本の支柱であった武士の身  
 分を捨てることによって、  
 過去の呪縛捨て

日本農業も、業界特有の  
 しがらみや常識などという  
 過去の呪縛を捨て、新たな  
 産業構造を構築する必要が  
 ある。

批判や排除の論理ではな  
 く、皆で力を合わせて、業  
 界目線ではなく、消費者や  
 国民目線で、  
 日本農業の復活は、農業  
 業界だけでなく、国家の健  
 全な発展を導く。  
 日本農業における、聖域  
 なき構造改革の断行、それ  
 が分水嶺(れい)だ。  
 できるかできないか、で  
 はない。やるかやらない  
 か、ただそれだけだ。